

## これまでの意見概要

## &lt;令和6年度第1回(5/30開催)審議会意見概要&gt;

## ○ 全県一学区化について

- ・特定の地域から急激に流出したことはなく、地方の高校の充足率の低下は少子化の影響が大きく左右していると思われる。
- ・中部地区への流入が若干増えているものの、そこまで急激な変化はないため、全県一学区化は見直す必要はないと思われる。学力についても一定程度の保障はできており下がってはいない。
- ・次世代を担う子供達により多くの選択肢があると将来を考える上で様々な幅が広がってくると考えており、全県一学区化は子供達の将来を考えた取組と考えている。
- ・生徒の流出入について、南部地区と中部地区など、公共交通機関の関係で移動が容易であるところの流動性が相対的に高くなっている。
- ・公立高校間の移動量よりも、私立高校が無償化になったことで、中部地区への集中が実質多くなったと感じている。
- ・経済的又はインフラのベースを考えた時に流動性の数値がどう評価できるかは考えなくてはならない。そういった背景をきちんと保障していかないと子供達の選択肢や視野を広げることに直接的な効果が得られないのではないかと考えている。

## ○ 定員の適正化について

- ・実学級数と必要学級数の乖離を解消するためには大規模な定員の見直しが必要になる。1学級当たりの定員数の見直しを考えながら、学校を保っていくことも必要ではないか。
- ・少子化が進むと教職員が減ることも危惧しており、物理的に学校を維持することが難しくなってくるため、統廃合を検討する必要があると思う。

## ○ 学校配置について

- ・県内の生徒に学びの機会を平等に提供することが大前提にあるのではないか。
- ・過疎地域では、学びたい学びがなく、断念して入学している生徒もいるのではないか。そのような生徒の学びの機会は検討する必要があると考えている。仕方なく通学しているのか、本当のニーズに合っているのかということを調査の上で学校配置を検討いただきたい。
- ・人気のある学科は、各地域にも配置、地域の子供達がより多くの選択肢をできる学校づくりをしていただきたい。
- ・学力だけで高校を選択している生徒だけではないため、質やソフト面からの満足度も今後定期的に追っていただけると裏付けになると思われる。
- ・高校生の居住地別の通学時間を見ると、地方の生徒は、通学時間が30分以内の生徒が多く、できる限り通える範囲に高校があった方が良いと感じた。
- ・通学手段があるか、通学できる範囲に高校があるかどうかは大きな要素になると思われ、交通の便が悪い地域における学校の存在意義は非常に大きいと思う。
- ・地域の高校は、その地域の活性化など、地域と密接に繋がっているため、地域の高校をより充実させて、それぞれの地域に根ざす子供達を確保していくことが重要と考えており、今後は自由選択の幅が広がるということに併せて、地域の特性に合わせた学校が必要になってくると考えている。
- ・地方に学校がなくなるということは大変なことが想定されるため、コストだけではなく、子供達の教育、地域における子供達の存在価値というものを考えながら進めていただきたい。

## ○ 地域進学重点校について

・地域進学重点校の入試倍率が近年1倍を割っているが、入学した生徒の能力の幅が広がっているのではないかと感じている。仙台市内の拠点校の進路状況として、4年制大学への進学率が向上しているが、地域進学重点校については、4年制大学への進学率はそこまで向上していない。大学への進学率は総じて高くなっていると思われるが、その伸び率が違うということは地域の高校に求められていることが幅広くなっていると感じており、地域の進学校には知識を深めることだけではなく、多様な子供達への学び方を網羅できるような工夫も必要なのではないかと感じた。

## ○ 通信制高校への進学者について

・通信制高校への進学率が高いことについて、中学校の不登校生徒の数が多いことが要因ではないかと思われる。  
・地方部に居住している生徒がどの程度私立の広域通信制高校に進学しているかということも追加で把握する必要があると思う。  
・私立の広域通信制高校では、全日制高校の中途退学者を受け入れていると思う。中途退学者の事由として進路変更の割合が高くなっているが、この進路変更先を把握した上でこれから検討していく必要があると思う。  
・中途退学の事由として進路変更が非常に高い割合となっているが、その多くは私立の通信制高校に進学していると感じている。  
・私立高校や私立の通信制高校の進学者が増加している要因として、学校生活に適応しかねている生徒の学習ニーズに合わせたこと取組を行っているためと思われる。県立高校が多様な学習ニーズに十分に対応しきれていないためと思われる。今の時代に合った大胆な特色を出していただきたい。具体的には一斉授業するだけでなく、メンターのような寄り添う形の教員もあるのではないか。

## ○ 新たなタイプの学校について

・新たなタイプの学校を設置する場合に、中部地区の通える範囲に居住している生徒は問題ないが、地方部の生徒への対応をどうするか検討が必要ではないか。  
・様々な要因で今の学校では生活できない生徒達が希望を持って学べる学校づくりを始めたという希望を持つことができる。  
・外国人労働者、外国ルーツを持つ方がこれから増えていくことが想定され、そのような生徒が入学することを想定しているのであれば、準備していく必要があると思う。

## ○ その他

・構想の位置付けについて、20年後ではなく15年後を見据えた指針としていただきたい。  
・産業界では人材不足が深刻な状況となっており、すべての産業において、なかなか採用できない状況。  
・少子化に伴って教員数を減らすのではなく、一定数維持していく必要があると考えている。減らされながらも、学力は維持し、生徒の多様なニーズに応じている状況である。私立・通信制高校へ流れている要因として、県立高校側の特色化が十分に図られておらず、それは教員の負担が大きくなり、特色を出す余裕もない状況からではないか。教員数を確保して、特色化や教育の質転換を県立高校で速やかに取り組んでいく必要がある。

## <令和5年度第1回(2/16開催)審議会意見概要>

### ○ 検討の進め方

- ・他の都道府県でも少子化の問題を抱えているが、それぞれ事情は異なっている。本県が抱えている状況をしっかりと把握して検討していく必要がある。
- ・教育だけではなく、福祉や産業など分野を超えて議論することが必要である。
- ・様々な方の知見を借りて、15年、20年後でも古くならないシステムを考えていく必要がある。

### ○ 学校・学科配置

- ・物理的に点在する生徒達をどのように集めて、高校生らしい学びを提供するためにはどうしたら良いか考えることが根底にあると思う。高校への寄宿舎の設置は考えられないか。
- ・英語科など入試倍率が高い学科を各所に配置することで、子供達が将来を選ぶ際の道筋が多くなるのではないか。
- ・地域に学校を残す形として、市町村立高校の可能性もある。

### ○ 学校の魅力化・特色化

- ・全国、海外から生徒を呼び込むような宮城県ならではの魅力づくりも必要ではないか。
- ・生徒の学習意欲を喚起するためにも、生徒の学習ニーズを中心としたカリキュラム編成にしていくことが重要である。

### ○ 生徒の進路選択

- ・中学生に対して高校の内容を分かりやすく伝えることはもちろん、実際に学んでみることも重要であると考えており、その点くくり募集は有効ではないか。
- ・中学校のうちから将来を考える学びを取り入れることが必要ではないか。

### ○ 様々な背景を抱えた生徒への対応

- ・中学校時代の学びの状況を高校に引き継いでいるか検証が必要。簡易に情報伝達できる仕組み作りの検討も必要ではないか。
- ・中学校では、特性を持つ生徒に対してその子に応じた指導を実施しているが、高校でもその環境があると良い。
- ・不登校生徒数の増加要因を分析していく必要がある。
- ・全国的に私立の広域通信制高校への進学者が増えているが、県内の動向を把握する必要がある。
- ・中途退学者を無くすための高校の在り方についても検討が必要ではないか。
- ・インクルーシブ教育について、通級指導も含めて、様々な支援体制が整ってきているところは承知しているが、その充実についても本審議会で議論いただきたい。学校の先生はもちろん、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど、1つのチームとして取り組んでいく必要がある。
- ・スクールロイヤーの拡充が必要ではないか。

## ○ 地域等との連携

- ・ 県立高校と地域との関わりを深めるための仕組み作りを検討していただきたい。
- ・ 地域には部活動をはじめ、様々な立場の有識者がいるのでぜひ活用いただきたい。
- ・ 教員の負担を軽減するために、講演会等の実施の際には、PTAの力を使っていただきたい。
- ・ 中小企業での高校生の採用が難しくなっている。生徒や先生に中小企業の魅力を知ってもらうために、先生方に周知する機会を作っていただきたい。

## ○ その他

- ・ 週末に部活動やテスト等があり、生徒も休む暇がないため、そのサポートについて今後検討が必要になるのではないか。
- ・ 教職員のモチベーションをこれまで以上に高めることに繋がる改革案が重要と考えている。
- ・ 子供の教育に係る予算は手厚くしていただきたい。特に人件費について、生徒と教員が触れ合う機会を確保するためにも、様々な人材を学校に配置いただきたいと考えている。
- ・ 小・中学校においても生徒数は年々減少しており、小学校1年生から中学校3年生まで単学級という小・中学校も少なくはなく、そこに在籍している生徒、高校に対して新たな出会いや多くの人との関わりを求めていると思う。